

札幌学院大学 人文学部報

Sapporo Gakuin University

●人間科学科 ●英語英米文学科
●臨床心理学科 ●こども発達学科
●大学院臨床心理学研究科

2006・11・1 No. 25

編集発行/札幌学院大学人文学部広報委員会
〒069-8555 江別市文京台11番地 ☎011-386-8111(代)

人文学部wwwトップ : <http://www.sgu.ac.jp/hum/index.html>
本誌バックナンバー : <http://www.sgu.ac.jp/hum/publish/gakubuho/index.html>



『人文学部卒業報告集』
(1981年3月～2006年3月)

一九七七年一月十日、人文学部人間科学科・英語英米文学科は本学商学部第二部商学科とともに、設置申請が認可され、同年四月一日、札幌商科大学人文学部が開設されることとなった。したがって、間もなく人文学部は開設三十周年を迎えることとなる。増設の二学部三学科は、いずれも札幌短期大学(商業科・商業科第二部および英文科)の発展的解消によるものであった。したがって、商学系以外の新学部は英文科を対学科とし、札幌短期大学および札幌商科大学の教養課程担当所属教員を主力とする新学科とによって学部を創造するという条件のもとで構想されることとなった。届出認可を含む、最近の大学設置基準の大綱化のもとでの設置認可申請とは異なり、当時の設置認可は全て設置基準に基づき厳しい審査を受けた。とくに新

領域の学部・学科の場合はないことである。英文科を対学科とする新学科ⅡX学科を何にするかが、大きな問題であった。英文系学科を含む二学科によって構成される私立文系学部の直近の先例が、松山商科大学人文学部(社会学科・英語英米文学科)であった。松山商科大学は現在の松山大学である。本学部と松山大学人文学部とは、大学間単位互換協定を締結することとなり、二〇〇三年九月、本学G館特別会議室で調印が行われた(『人文学部報』第二号)。私は、あいさつのなかでこの縁に触れずにはいられなかった。しかし、本学園両大学の教養部門担当教員を主力とする学科を目標したので、新学科ⅡX学科は、社会学をもひとつの核として含む学科として追求されることとなる。そこで、先駆的に出現していた人間関係学科や人間科学科を参考にして、X学科は全国三番目の人間科学科として発足した。人間関係学科や人間科学科の先例は、社会学、心理学および教育学の三専修を定型

としていた。しかし、新学科はより広い領域を含む学科として、社会生活と人間・人間の形成と発達および思想文化と人間の三領域によって構成するという新たな挑戦を実現させた。このような新たな領域の開拓とその具体化としての全国的にも先駆的な学科の実現は、その後、本学部臨床心理学およびこども発達学科の増設へとつながっていく。人文学部は、無から生じたのではない。それは、札幌短期大学の廃校によって開設されたのである。教職員のみならず、当時の在学生(現在五〇歳前後の人々)は、全学集会や学園・大学との協議会を通じた真剣な論議の結果、学園の将来構想Ⅱ大学二学部の増設とその前提となる自校の廃校を承認したのである。というよりも、正確には決断したというべきであろう。その決断の条件は、新学部の増設が札幌短期大学の発展的解消Ⅱ伝統を継承することであった。「人間生活の真実は必ず根深い伝統を形成するものである。新

しい思想と行動が歴史的真理を含むならば、それは当然、新しい伝統を形成しなければならぬ。ところが新しい伝統ができるためにはそれに先行する前代の大きな伝統を正しく継承せざるをえなくなる(『務台理作「伝統」)。ここで紙幅の関係上、具体的な根拠に触れることはできないが、人文学部は、新しい伝統を形成したⅡ前代の伝統を基本的に継承したと信ずる。したがって、私は人文学部開設三十周年を前にして、札幌短期大学卒業生の人々につきぎのように、あなたがたの決断は正しかった、と。このようにいうのは、過去についての単なる回想ではない。それは現在の問題であり、未来の問題でもある。決断には、負の決断もある。正しい決断は、大局的判断にもとづく決断であろう。伝統は革新を伴うことによって継承され、革新は伝統を進展させることによつて可能となる。本学部は、そして本学は、そのいつその発展を目指して、いま、決断のときにある。(人文学部長)

人文学部開設三十周年を前にして — 伝統と革新 —

廣川 和市

発掘実習に参加して

六月二十七日から七月一日まで、文化実習Aの実習として、厚真町上幌内モイ遺跡の発掘調査に参加した。で四泊五日。終わってみれば三泊四日だった？という体感スピードであったが、長き的には修学旅行並みである。

初日は昼過ぎに厚真町に到着し、最初に教育委員会に厚真町の郷土資料室と二〇〇五年年度の発掘調査成果展を見学した。成果展はモイ遺跡の調査成果の展示であり、夕方まで主に二階で説明を受け、モイ遺跡に関する知識を得た。夕食はジギスカンが用意されていて、厚真町教



育委員会の皆様との会食であった。とても親切にしていた。明日への緊張が少しほぐれた。しかし、朝七時起床で、夕食後も九時まで実習という健康的ではあるが、厳しいスケジュールが組まれている。

次の日から実際に作業員さんにもまじっての発掘かつ実習がスタートした。初日はひたすら作業員さんと列に並び決まった厚さで土を削っていった。主に使った道具は移植こてと園芸用の小さなスコップと、じょれんというくわに似た道具をつかった。薄く削る時は移植こてをつかい、厚く削る時はじょれんをつかった。どちらも見た目は地味だが手足腰にひどく響く運動である。出てくる遺物を傷ついたら大変だと思い慎重に掘っていたら、「あんたそんなんじゃないよ」と作業員さんいわれ、見本を見せていただくと、案外ガシガシ掘っていくではないか。見習って掘り進めること数刻にもかかわらず、遺物は出ない。しかし、休憩の時間になると他のメンバーたちは「いやー出た」とおっしゃる。現場に向か

うと確かにある。周りの土をきれいにとってある黒曜石、土器、焼土、石など。確かに発掘を始める前に遺跡を案内され、それらの遺物をこの目で見ただが、土の中からひょっこり出てくるのはリアリティーが全然違う。そこに確かに人がいたという何か生々しいものをメンバーが掘り出した遺物を見て感じた。その後実習の間に僕は何か掘り当てたかという……：右一個。発掘とは、土を削って遺物を出すことだが、さらにそれを記録し、研究資料として公表しなければならぬ。実習三日目からは、そのための記録方法として、トータルステーションという機械による遺物の出た地点の測定、遺構の断層の実測、写真撮影を、発掘と併行して行った。それぞれ繊細かつ大胆さも必要な難しい作業であった。夕食後は、資料整理室で、資料整理や報告書作成の方法を教えていた。四日目の夜は、全員撮影した写真の講習会を行った。ピントがあつていたり難しいものである。

最終日は、教育委員会の企画である子供たちの体験発掘と勾玉作りを、お手伝いした。それまでの経験を生かしながら子供たちをサポートしたのだが、うまくいったのか定かではない。

実は、僕は今回の授業をとるまで考古学には特に興味はなかったし、全く知識も無かった。しかし、実習に来てしまえば、否応なしに頭の中は発掘のことについてはいっぱい湧いて出てくる。他味が自然と湧いて出てくる。他の人々が普通じゃ体験し得ないことを体験でき、かつ健康的で、景色が最高で楽しかったというのが正直な感想である。

(人間科学科三年)

佐々木遼平

社会福祉援助技術
現場実習を終えて

私は、八月十四日から九月十五日まで約一ヶ月間、新ひだか町社会福祉協議会で実習をさせていただいた。初めての实習であったため、とても緊張しながら不安を抱えての实習となった。社会福祉協議会については事前学習である程度、理解していたつもりであったが、なかなか具体的なイメージがつかめていない中で実習が始まった。

実習を始めて最初の土日に、地域の福祉イベントが行われた。このイベントは社会福祉協議会が中心となり地域の住民やボランティア、各団体が出店や展示、発表をして住民同士の交流を図り、福祉について理解を深めることを目的として毎年行われている。私はスタッフとし



て参加させていただき、スタッフ側や参加者の色々な「顔」をみることで、たくさんの方にきていただいていた地域の「つながり」を感じることができた。

また、実習中は、デイサービスセンターでも三日間実習したり、町にある施設の関係者の方や地域の方にお話しを伺う機会を与えていただいた。お話しを伺うなかで地域が抱えている問題や現状を知ることができた。さらに、町の社会資源の多さに驚いた。社会福祉協議会の方に直接指導を受けるなかでも、様々な貴重なお話しを伺うことができた。

この一ヶ月間の実習は私にとっていろいろ考えさせられ、新しい発見が数多くできるものとなった。そして楽しく有意義な実習であった。

(人間科学科三年)

西村 梓

二〇〇六年度 人文学部夏期集中講義

人間科学科

人間論特殊講義



第五回目となる今年度は「北海道の自然と人間との共生を考える」と題して、七月三十一日から八月五日までの六日間にわたって開講された。北海道の自然は、本州と比べれば一見きわめて豊かであるように見える。しかし、仔細に見ればそれは外見だけであって、北海道の自然生態系には今さまざまなかたちで危機が進行しており、多くの生物が絶滅の淵に立たされている。知床もまた世界自然遺産に登録されたことで自然保護と観光との両立に悩んでいる。そのような状況を踏まえて、北海道の自然と人間の共生という課題を考えて見たい。これが今回の講座の趣旨であった。講師陣は合計一人で、それぞれの分野の第一線で活躍しておられる方々ばかりの超豪華な顔ぶれであった。冒頭の石弘之氏は、世界の環境問題の現況を説明しながら、今地球全体で温暖化やエネルギー資源の節約などに取り組みべき必然性を力説された。小野有五氏は、今下川町で計画されているサンルダム建設を例に、ダムに代わる新しい治水のあり方を提起された。中川元氏は知床が世界自然遺産に登録された経緯と今直面する問題、小林万里氏が北方の海生哺乳類の現状と保護、間野勉氏がヒグマの保護と最近のDNA分析の結果、池田透氏がアライグマを初めとする外来生物による生態系攪乱の問題、黒沢信道氏が釧路湿原で展開されつつある自然再生事業について、それぞれ視聴覚教材を駆使して、熱のこもったお話をされた。最後に私が環境倫理学の現状と可能性を話して全体の締めくくりとした。

市民と学生を交えた受講生は最大時で一三〇名、最小時で約七〇名であった。今回の講座の特徴は六対四くらいの比率で一般市民の受講が学生のそれを上回ったことである。講義終了後の質問が市民からだけだったのも残念であった。地球市民として環境問題が常識となるべき時

代に、学生の熱意をどう導き出すかが課題として残ったように思われる。
(奥谷 浩一)

社会福祉特殊講義

今年度は、北海道医療大学の花澤佳代先生をお招きして、医療領域で働くソーシャルワーカーの役割と機能について理解を深めることを主眼に講義をいただいた。講義内容は、精神科ソーシャルワーカーや医療ソーシャルワーカーの業務に関わる実践的内容を軸に、医療福祉の歴史と原理を丁寧に紐解きながら、医療領域における福祉の視点と今日的課題を理論的に関連付けわかりやすく説明してくださった。花澤先生は、医療福祉論をご専門とする立場から本講義を構成してくださったが、改めて大事だと思われたことは、医療ソーシャルワークの独自性に偏らず常にソーシャルワークの共通性をふまえた論を展開されていたことであった。また途中の講義では、医療ソーシャルワーカーとして活躍する本学卒業生をゲストスピーカーに招いていただいたが、これは学生のこの仕事に対する関心を大いに引き付ける貴重な機会になったようである。先生の心遣い

に感謝したい。社会福祉士を養成する側の事情について若干紹介すると、医療機関のソーシャルワーカー養成のための科目や実習は、これまで社会福祉士養成カリキュラムに正式に位置づけられてはいなかった。今年度から実習場所として病院等の医療機関が認められたが、今後学生が実習先として希望する可能性があることも考えると、本講義の持つ意義は大きい。
花澤先生には、本学科目目「社会福祉援助技術各論A・B」でもご協力いただいている。この場を借りて改めて感謝申し上げたい。
(松川 敏道)

英語英米文学科

アメリカ文学特殊講義B

毎年夏休みになると集中講義を受けている。
今回私が履修したのは主に黒人奴隷フレデリック・ダグラスについての講義だった。佐藤晴雄先生は奴隷制度の始まりから奴隷解放まで資料をもとに講義された。

この講義は普段受けている講義とは少し違っていた。それは、OHPに映された挿絵付の黒人奴隷の本と配られるプリントが全て英語だったからだ。講義内容に関連して紹介される写真は先生が撮った写真。先生は過去に訪れた現地の写真を用い、そこで現地の人と話しをしたこと



を話してくださいました。今は、インターネットを使えば必要な事柄、写真、映像は全て入手できる。しかし、先生が実際に訪れ、その時撮った写真を見ながら進められた講義は普段の講義とは違い、より興味がそそられた。
今回の講義は一週間連続で受けたり、資料が全て英語だったりと、楽なものではなかったが、そこで得られたものは無駄ではない。見せられる写真に先生が映っていたり、何気ない道路の写真だったり、普段は撮らないお墓の写真だったり、写真も貴重な資料だった。この講義で、自分は勉強していると実感し、英文科の学生であるという自覚が増した。
(英語英米文学科三年 関 幸恵)

臨床心理学科

心理療法E

心理臨床特殊講義

犯罪心理学

障害児心理学

本年度の臨床心理学科の集中講義は、以下に紹介する四科目

であった。ご多忙の中、ご担当下さった先生方に、なによりもまず深く感謝申し上げます。

「心理療法E」「心理臨床特殊講義」は斉藤美香先生にご担当頂いた。先生には本学科設立当初から、カリキュラムの実動に多大なご助力を賜っている。今回も一週間を本学科のために割いて頂いた。「心理療法E」は子供の心理的援助の中心的技法である、遊戯療法に関する講義であった。代表的理論の解説ののち、事例の提示と解釈、体験的演習を交えて、子供の心理療法のエッセンスが伝えられた。「心理臨床特殊講義」は医療心理臨床関連の講義で、医療現場での臨床心理士の立場や活動について学ぶ科目である。臨床心理士の位置付けと役どころ、他のスタッフとの望ましい連携のあり方、現場に必要な知識と技量について講義がなされた。

「犯罪心理学」は、大橋靖史先生に担当して頂いた。今回で二度目となる。心理学に関心を持つ学生が多く、隔年開講でもあることから、受講希望者は多数に上り、やむを得ず人数制限をかけることとなった。抽選に漏れた人文学部以外の学生諸君には申し訳ないことをした。次回から毎年開講にできるよう、学科で検討している。犯罪者、被害者、一般市民、それぞれに焦点を当て、広範なトピックについて実例を示しながら、講義

がなされた。

「障害児病理学」は、田中康雄先生にご担当頂いた。学校教育現場で遭遇する、発達障害について学ぶことが目的であった。近年発達障害が社会的に大きな注目を浴びるようになり、誤解や偏見を排すること、適切な関わり方と援助が望まれている。本学研究科の学生が多数参加するなど、単位取得に関係なく聴講がなされた。

今年度は集中講義が多く、履修控えが発生し、貴重な講義に触れる好機を学生自ら逸してしまつたように思われる。これは教務上の失策でもあるので改善を試みたいが、学生諸君は単位数や受講負担といった目先の楽を優先することなく、得難い機会を活かしてほしい。

(森 直久)

若者の居場所づくり —人文学部臨床心理学科設立五周年記念講演会—

六月三十日(金)の三講時目を利用して表記の講演会がSGUホールで開催され、臨床心理学科の一年生を中心に他学科の学生、大学院生、教員など二〇〇名ほどが参加し、講師の話に熱心に聞き入った。講師の跡部敏之先生は、昨春まで芦別市にある私立高等学校



の校長を務められ、現在はそこの相談役と高校に隣接する大学の教壇にも立たれているが、先生の仕事の履歴としては北海道の特殊教育の草分けの一人で、特に言語治療教育(ことばの教室)のシステムと実践方法の基礎づくりを主導するという役割を果たしたことが先ず特記される。教員生活の後半には、幾つかの養護学校長や道立特殊教育センター所長などの重職を歴任して定年を迎えられたが、その後も多くの人々から要請されて、中学校・高校をドロップ・アウトした若者たちの居場所であり再起のための拠点でもある通信制の高等学校「星椋国際高等学校」づくりに校長として七年間取り組まれ、その場を通信制の大学・星椋大学への進路の一つにまで位置付けた人物である。講演では、人の「こころ」は「認識」と「社会性」という二つが響きあひながら形成されていくものだが、現代日本の社会環境がもつ青少年の心の形成に対する負の側面を鋭く指摘した。そして、自ら取り組まれた

教育実践と若者の居場所づくりの経験を沢山の具体例を紹介しながら語られたが、それらはいずれも心の深部までしみ渡る感動的なもので、臨床心理学科設立五周年記念講演会にふさわしいものであった。

(伊藤 則博)

人文学部合同講演会 —身体表現としての芸術— —バレエを通して—

前期の人文学部合同講演会が七月七日第三講時、本学SGUホールにて開催された。対象学生は一年生。今年から新たに「こども発達学科」の諸君が人文学部の仲間入りをはたし、自由参加の学生、教職員を含めると聴衆は三〇〇名を超えた。「身体表現としての芸術—バレエを通して—」を題目とし、北海道バレエ協会理事の小泉の子氏にお話を伺った。小泉氏は、ご自分の運



営されているバレエ団員一名をホール舞台にあげ、バレエの歴史とジャンルについて具体的に団員の舞踏をおしてご説明された。終了後実施したアンケートの一つを紹介したい。「初めてバレエをみました。それまではたの踊りかと思つていたのですが、実際目にしてみると全然違いました。動きの一つ一つに意味があり、言葉がなくとも伝わるものがありました。：私はどこか不思議の国に行ったような感覚になりました。：私は言葉以外で人の心を動かせるという大切な事を学びました。舞台で実演されたバレエを生で初めてみることできた学生が大半であり、みな息をのみ、食い入るように演技をみつめていた。ちなみに舞台設定は本学演劇サークル「サンズサン」学生諸君の全面的な無償の協力を得た。彼らは講演前に小泉バレエ団に出向き準備を進めてくれた。学生・教員・職員三者が一体となつてつくろあげる、まさに本学の学風を物語る講演会までの道筋であった。



(岡崎 清)

英語キャンプ

七月三十一日から四日間苦小牧で行われたオールイングリッシュキャンプに参加してきました。今年は去年より二倍以上の学生約三〇名が集まりました、とてもぎやかなキャンプになりました。最初は、お互いが初対面だったので、少し緊張していたこともあり、うまく英語でコミュニケーションをとることができませんでしたが、目を重ねるごとに英語を話したい、という皆の目標が実際のものになって、最終日にはお互いが自然に英語で声を掛け合うようになっていました。



一日目は簡単なアクティビティから始まり、今年も参加してくれたGrose先生の娘 Hannahさんと息子Tanさんのイギリスでの大学生活について話を聞きました。これはリスニングの勉強にもなり、更には異文化を知る良い機会になりました。二日目と三日目は異文化体験（初めて行った

場所での土地を知るためには何が大切かを、英語を使って学ぶ」というような活動を行ったり、Show and Tell(持参した写真の紹介)を行ったり、外国のボードゲームで楽しんだ後、外でバーベキューをしました。天候は比較的に涼しく過ごしやすかったです。全ての活動はペアワークであつたりグループワークで、学生全員が学んだことをすく

に使い、英語でのコミュニケーションに役立てることが出来ると思います。このイングリッシュキャンプは、日常生活の中で自然に英語と触れることができ、英語を身につけたい私たちにとつて、とても良い場であると思います。

最後になりましたが、キャンプを成功させるために一生懸命支えてくださった先生方に感謝します。来年もぜひ参加したいと思います。
Teachers, thank you very much for all of your help!
(英語英米文学科三年 内浦ゆかり)

JALIT主催

CALLL国際学会

本学にて開催

六月三日から四日にかけて本学でJALIT(日本英語教育学会)主催のCALLL国際学会が開催されました。本学会は英語学習にテクノロジーの活用を促進し、コンピュータを利用した英語教育に関する分野で先端的な実践、研究の成果を英語教育関係者に提供することを目指しています。北海道ではじめて開催された今回の研究会には、海外からの講演者を含め、海外一三方国出身の英語教育関係者を含め約一六〇名が本学に集い、最新の研究の成果を共有しました。

グテレツズ会長(立命館大学)の挨拶に続いて、布施学長の歓迎の言葉で二日間に渡る学会がスタートしました。コンピュータを利用した英語授業、学習に関する研究発表と講演会は一〇〇件に達し、活発で有益な議論が展開されました。コンピュータを活用した速読能力の向

上や、携帯電話を介したライティングの練習などの実践報告や、学習成果に対する検証が行なわれていました。特に、ベルギーからの招待講演者であるコルパート博士(アントワープ大学)の講演は参加者全員に感銘を与えるものでした。技術革新に伴い、多様な技術とメディアが利用可能となつている昨今の英語学習の現状を踏まえ、学生の学習環境の徹底的な分析と、学際的な学問成果に基づいた学習計画の重要性を強調されました。

また、参加した研究者の大半が外国人であつたため、本学学生が大麻駅に立つて道案内をしたり、受付や接遇などで学んできた英語を駆使して活躍しました。学生達の笑顔が遠来の研究者にとっても好評でした。ヒンクلمان先生・グロース先生を中心とした実行委員会の皆さんご苦労様でした。(宮町 誠)

海外留学

英語英米文学科半期海外留学の第七期生一八名がカリフォルニア大学(アメリカ)パシフィッククルーセラ大学(アメリカ)とモナッシュ大学(オーストラリア)で学んでいる。留学生活を通して異文化コミュニケーション、異文化理解を深めることを期待したい。

2006年度英語英米文学科半期海外留学参加状況

2006年10月30日現在

留学先大学	参加人数	男	女
アメリカ カリフォルニア大学デーヴィス校	7	2	5
アメリカ パシフィッククルーセラ大学	4	2	2
オーストラリア モナッシュ大学	7*	3	4

*オーストラリアモナッシュ大学に人間科学科1名(女)が含まれています。

1つ1つも発達学科
有意義だった学外授業

去る九月三十日(土)、こども発達学科二期生と教職員
の総勢五六名が倶知安・ニセコ方面の教育施設等
へ見学旅行(学外授業)を行いました。この企画は、
ゼミナール教育の一環、学生間の交流等を目的とし
た学科開設記念事業として行ったものです。

当日は、朝九時にバスで大学を出発、倶知安風土
館、小川原脩記念美術館を訪問し、倶知安の歴史を
学び、絵画や彫刻を鑑賞しました。その後倶知安西
小学校権山分校を訪れ、ボルダリングウオール体験
(壁登り)や分校の児童らとの交流を図りました。最
後にニセコ町の高橋牧場・ミルク工房でアイスクリ
ーム作りを体験し、自分たちがつくったアイスクリ
ームに舌鼓を打ちました。全ての施設を訪問し大学
に到着したのは夕暮れの午後六時過ぎ。元気が取り
柄のこども発達学科生ですが、さすがに疲れきった
様子でした。ただアンケートの結果をみると、九七%
もの学生が「学外授業は有意義だった」と回答して
おり、企画自体は一応の成果をみたといえます。



本学科生はこどもの発達教育を本格的に学び、全
員が小学校教員にな
りたいという共通の
目標を持っていま
す。三年後、彼らが自
分たちの夢を実現さ
せることを願い、そ
のために我々教職員
はバックアップを惜
しみません。

(教務課)

2006(平成18)年度人文学部校務分掌

2006年4月1日現在

役職・委員会等の名称	学部枠	人 間 科 学 科	英語英米文学科	臨 床 心 理 学 科	こども発達学科
学部長		●廣川			
大学院研究科長				安岡	
学科長		○湯本	○中村	☆滝沢 井手	小林
心理臨床センター長					
人文学部教務委員会 (含 視聴覚・LL担当委員)	5	○木戸、奥田	○岡崎、(グローズ)	◎森	鈴木
人文学部広報委員会 人文学部報編集委員 学院評論編集委員(全学) 人文学部WWW管理者	4	○臼杵、舩田 (WWW、◎奥田)	坪井		小出
人文学会幹事会		松川	川瀬	伊藤	
全学教務委員会	1		岡崎		
学生委員会	1			◎佐野	
進路支援委員会 (就職委員会(全学))	4	○笹岡、内田	○山添、(西)	葛西	
学部入試委員会 (広報入試委員会(全学))	4	新田	○菅原	●橋本	大瀬
図書委員会	1			池田	
研究委員会	1	松川			
電算機センター運営委員会	1		ヒンクルマン		
国際交流委員会	1				諸
教職課程委員会	1	富田、工藤			
” (教育実習主担当)		工藤、富田、(片桐) (小原)	○(櫻田)		
国庫助成教授会連合		○船津			
学生相談室相談員 (総合教育センター)					
部門協議員		○船津	宮町、 (ヒンクルマン)		
各類協議員					
学長		◎布施			
全学部長職		●鶴丸(入試)			○新國(図書館長)
全学委員長職					
大学協議員(学部・選挙)	2	○湯本	○中村		
大学協議員(センター選出)		○内田	宮町		
理事(選挙)		川合、酒井、杉山			
教員評議員(選挙)	1			☆滝沢 ◎森	
アドミッションアドバイザー			グローズ		
政策推進室		○富田			
留研		松本	津田(平体)(前期)		
		奥谷(社会連携センター)		橋本(組合執行委員)	

備考 1. ○印は継続 2. ◎は3年目 3. ●は4年目 4. ☆は5年目
5. 英語英米文学科の()は、正規委員ではなく、学科独自に設けたサポート役 互助会 奥田

こども発達学科に 入学して

私は今、小学校教諭一種免許、養護学校教諭一種免許、認定心理士の資格という三つの資格取得を目指しています。認定心理士の資格は心理士の資格としては小さいのですが、心に様々な問題を抱えている現代のこどもと向き合っていくためにも、発達段階に応じた心の変化を勉強し、心理の分野にも強い教師になりたいと取得を目指そうと決めました。

こども発達学科の講義は、子ども論特殊講義や生徒指導論など、こどもに関する講義がとても多いです。また、発問に対し学生が自分の意見を言い、みんなで作るといった講義や、実験をしながら考える講義もあり、とても面白いです。そして、もし小学生に分数を教えるならどのよう

に教えるかという実践的なこともしました。一つのことを教えるにも教え方は何通りもあり、どの方法が一番わかりやすいのかを、考えていく必要があると私は感じました。

教師になるには、教員採用試験を受けなければいけません。この試験は毎年倍率がとても高いです。そして、小学校で働くには全教科を一人で教えなければならぬので、今からきちんと勉強をしていこうと思っています。しかし、勉強だけをしていてもこどもとの接し方はわかりません。そのため実際にこどもと関わる機会を増やして接し方も学んでいきたいと思えます。

(こども発達学科一年
増谷 梓)

2006年度学部教員の 人事、研究活動等 (4/259/30)

◎海外研究出張

●**笹岡 征雄** ○六年四月十四日～二十一日 アメリカ「ボ

ストンマラソン参加」

●**森 直久** ○六年七月一日

～八日 オーストラリア「ISSBD第一九回国際会議参加及び発表」

●**臼杵 勲** ○六年七月二十三日～三十日 中国「国際シンポジウム 東北アジアにおける遼・金・蒙元期の都市」

●**臼杵 勲** ○六年八月十四日～二十五日 モンゴル「私学振興・共済事業団学術研究振興資金による遺跡調査」

●**鶴丸 俊明** ○六年九月二日

～十九日 モンゴル「モンゴル科学アカデミーとの共同発掘及び文化財保存修復を目的とした視察」

●**臼杵 勲** ○六年九月二十二日～十月一日 中国「契丹関連遺跡の資料収集」

◎出版物

●**富田 充保** (分担執筆)『現代教育のキーワード』教育学科

研究会編 大月書店 二〇〇六年五月二十日 二八四頁

二五〇〇円＋税

●**小出 良幸** (分担執筆)『宇宙から見た地質―日本と世界―』加藤碩一・山口靖・渡辺

宏・薦田麻子編 朝倉書店 二〇〇六年六月二十五日 一五〇頁 七七七〇円(税込)

●**臼杵 勲** (共編著)『北方世界の交流と変容 中世の北東アジアと日本列島』山川出版

社 二〇〇六年八月 二二六頁 一九〇〇円＋税

◎委嘱発令

●**廣川 和希** 北海道私立専修学校各種学校教員認定委員会

委員(北海道私立専修学校各種学校教員認定委員会) ○五年六月一日～〇七年五月三十一日

●**廣川 和希** 番組審議会副委員長(札幌テレビ放送) ○六年四月一日～〇七年三月三十一日

●**川合増太郎** 北海道ドイツ文学会幹事(北海道ドイツ文学会) ○六年四月一日～〇八年三月三十一日

●**松川 敏道** 石狩市障害福祉計画作成委員会委員長(石狩市) ○六年七月二十六日～〇八年七月二十五日

◎研究助成

●**菅原 秀二**「十八世紀イギリ

ス都市における市民的社交圏の形成―地域社会、消費文化、貧困― 共同研究者(科学研究費補助金 基盤研究B) 五七〇万円

●**新田 雅子**「後期高齢期の夫婦のみ世帯における生活課題特性」(財団法人北海道高齢者問題研究協会) 三四・五万円

●**臼杵 勲**「北東アジア中世遺跡の考古学的研究」代表(科学研究費補助金 特定領域研究) 八七〇万円

●**臼杵 勲**「北海道における古代から近世の遺跡の暦年代」代表(科学研究費補助金 基盤研究B) 四〇〇万円

●**臼杵 勲**「契丹城郭の比較考古学・文化財的研究」代表(日本私立学校振興・共済事業団学術研究振興資金) 一七〇万円

編集後記

新学科を迎えた今年度ですが、早くも前期が終了しました。本号では、講義や行事の一部をご紹介します。教員・学生ともに充実した日々でした。

(編集委員長

臼杵 勲)